二十一世紀に生きる仏教徒を育成

横浜善光寺留学僧育英会の第十一回総会を開催

横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長、事務局＝横浜市港南区日野中央一ノ一二ノ九・曹洞宗善光寺内）は第十一回総会を平成八年十一月二日午後二時から、善光寺で開催した。第十三回育英生の募集は十一月十日に論文提出が締め切られた。

総会に先だち「釈迦殿」で、阿部慈園参与（明治大学助教授）の司会により開会式が執り行われた。黒田理事長の導師で本尊上供の後、東隆眞理事（駒沢女子大学学長）が講演。宮本延雄理事（鶴見大学理事）と来賓の曹洞宗大仙寺・一適隆信住職（埼玉県）が挨拶した。

仏教の国際性を拡大

東理事は善光寺育英会の原点を振り返り、「日本仏教は学問的に高いレベルにあるかもしれないが、教化力という点からは非常に弱いと思う。これからは優れた人材を多く育てることが大事であり、そのお手伝いができればという願いがこのように実った」と意義を語った。

また昭和六十年度の第一回から平成八年度第十二回までに採用した育英生は七十五人にのぼり、関係国は十七ヵ国・一地域に及ぶと報告。「一、二年のうちに百人を超えることになるのではないか」と話した。

さらに育英生らに対し、「二十一世紀に生きる仏教徒として、前向きの研究をしていただきたいと切に願う。これからの仏教のあり方を模索する上で参考になり刺激になる研究、これからの仏教を築くために、どうしてもやっておかなければならない研究をやっていただきたい」と要望。「インターネットの時代を迎えながら、日本仏教には国際仏教センターのような機能をもつ情報発進基地はひとつもない」とも指摘し、仏教の国際性という観点からイスラムへの関心を強めていることを明かした。

「イスラムのことを全然知らないで仏教の国際化を言うことはできない。イスラムの研究者によると、イスラム教にとって仏教は全くの異教であり、異教徒の存在は許すことができないし、理解し合おうという考えはないという。しかし私は仏教とイスラム教の共通点から探っていきたい。そこからイスラム世界への大いなる理解を進めていきたい」と結んだ。

この後、宮本理事は「善光寺育英会は決して大きな存在ではないが、会の温かさ、願いはほかの何ものにも負けないものがある。育英会の心は自未得度先度他の心だ」と挨拶し、「善光寺育英会の大ファンの一人」という一適老師は、「世界の人々が共に境界を超えて仲良くつき合うことが世界平和につながる。そのパワーの源泉は信だ。皆さんは自ら学んだことを大きなパワーにしてほしい」と期待の言葉を述べた。

育英会の前途に期待

黒田理事長は「何もないところから寺を興し

て二十八年になる。開創十五周年で釈迦殿を建立した。仏天のご加護に報いようと、誓願の心、念ずる心で育英会を始めてから早や十一年になる。仏様の素晴らしさは三世ぶっ通しである。仏様も喜び、人々も喜ぶところに心を一つにして頑張りたいと思っている」と自らの願いと決意を表明した。

最後に阿部参与は、「私は二十年以上も前に永平寺の育英金でインドへ留学した。多くの祖師方は求法の旅から弘法の旅に向かわれた。八十人に及ぶ育英生の中から、法顕や義浄にもまさる弘法の祖師が出ることを期待する」と述べて開会式を結んだ。

引き続いて総会に入り、まず第十二回育英生の三上俊弘氏が、インド・マドラス大学での留学生活とヒンドゥー教の研究を通して、インド仏教の現状について卓話を行ない、出席した育英生らが一人々々現況報告を兼ねて自己紹介と抱負を述べた。

議事は今年度行事報告、第十三回辞令交付式の日程と記念講演の件。さらに出版事業として①『成寿』二十七号を故・伊藤喜三郎顧問の特集とする②育英生の論文集第三巻を故・前角博雄顧問の特集号として出版③道元禅師生誕八百年記念事業として『道元の二十一世紀』(仮称)を上梓――などを決めた。

また役員人事で大本山總持寺の成田芳髄新貫首を名誉顧問に推戴したことが報告され、スイス・ローザンヌ大学に留学中の第十二回育英生・計良隆世氏からの要望に応えて、来年秋頃に仏書贈呈を計画していることも発表された。

贈呈仏書は『大蔵経』と『正法眼蔵』、『伝光録』などになるもようである。